

図書館だより

57

①稲上毅著『ポスト工業化と企業社会』ミネルヴァ書房 (iv+315頁,A5判)

本書は、現代社会を「企業社会」と「ポスト工業化」を視点として分析した論議で編んだ、この四半世紀における福上社会学の成果である。副題のとおり、労働の分野で「20世紀第4四半期とはどういう時代だったのか」が明らかにされているが、随所に見られる切り口の深さ、今でも色あせない新鮮さに驚かされる。混迷を深める21世紀第1四半期の展望も期待したい。

②八代尚宏編『官製市場』改革』日本経済新聞社 (viii+249頁,A5判)

また、新しい概念が登場した。「官製市場」がそれである。政府の失敗に対して、これまでも政策提言がなされてきたが、「官製市場」という概念のもと、よりきめ細やかな分析がなされている。今後は、この概念がより有効な政策提言に結びついていくか、個々の政策毎に有効性が問われることとなる。規制改革・民間開放を主張する人たちの問題提起の書となっている。

③道幸哲也著『成果主義時代のワークルール』旬報社 (199頁,A5判)

企業の生存競争が激化する中で、ややもすると職場の権利がないがしろにされる現在、会社生活をスタートしようとする新大生に対する応援・入門の書として本書は編集された。「平成は中世化」し、労働組合にはあまり期待できないと悲観しながらも、フレッシュ(ウー)マンを見る、30年来学生に裁判例を講義し、議論してきた著者の眼には温かいものがある。

⑦古田英明他著『転職する人、できない人』新潮社 (234頁,B6判)

⑧浅井宏純他著『自分の子供をニートにさせない方法』宝島社 (206頁,B6判)

⑨平川景子他編著『女たちのオルタナティブ』明石書店 (296頁,B6判)

⑩大久保武著『日系人の労働市場とエスニシティ』御茶の水書房 (v+316頁,A5判)

⑪加藤昌男著『超・成果主義』日本経済新聞社 (364頁,B6判)

④梶田孝道他著『顔の见えない定住化』名古屋大学出版会 (vii+316+25頁,A5判)

日系ブラジル人の日本への移住過程に関して、国家、市場、移民ネットワークをキーワードに分析した著者自信の作である。「明日の隣人」から「顔の见えない定住化」まで外国人労働者の現状は進化している。政治的な産物として在留資格「日系人」枠は生まれたが、日系ブラジル人を含め、移住者の社会・国家への実質的な統合はこれからの課題として残されている。

⑤山本寛著『転職とキャリアの研究』創成社 (x+304頁,A5判)

本書は、勤労者の転職・出向等の組織間移動に関して、その要因や影響などを「組織間キャリア発達」の観点から考察している。転職によってキャリア発達を図るアメリカ等と異なると、日本では、転職は一般的に否定的な見方がなされてきた。雇用流動化時代の新しいエトスが求められるとともに、そのような状況の中でキャリアがどのように発達するか興味深い。

⑥朝日新聞社広告局編著『仕事力』朝日新聞社 (252頁,B6判)

15人の「強い仕事力」を発揮し続けた著名人の仕事論をインタビューによって引き出している。不安の時代を反映してか、仕事論は盛んであるが、誰もが納得するものはないであろうし、すべてを真に受けていけば、人格は分裂してしまう。今の自分を安心させる、あるいは少し成長しようと考えている人が、つまみ読む程度におさえおきの為の適当なところであろうか。

⑫山口幸雄他著『労働事件審理ノート』判例タイムズ社 (viii+158頁,A5判)

⑬園田茂人編著『東アジアの階層比較』中央大学出版部 (xiii+235+10頁,A5判)

⑭真田是著『社会保障と社会改革』かもがわ出版 (189頁,B6判)

⑮仲光志賀子著『福祉のまちづくり』海鳥社 (217頁,B6判)

⑯関満博著『現場主義の人材育成法』筑摩書房 (222頁,新書判)

今月の耳より情報

以前当欄でランガタンの「図書館学の5法則」について紹介したが、その根本精神は、図書館は、資料の保存を主眼とする文書館とは異なり、利用されるためにあるということであると思う。それでは、よりよく利用されるためにはどうしたらいいのか。図書館資料の管理という観点のみでなく、利用者の立場にたって発想することであろう。しかし、そうはいっても図書館の管理者側は、管理しやすい図書館を構想してしまいがちである。それを自ら戒めるためにも、毎年「米館者アンケート」を実施するとともに、目安箱(「みんなの声」)を設置した。これまでも、ご提出いただいたご意見をもとに、返却箱の設置、コピーサービスの料金の値下げ、貸出システムの簡素化、閲覧室の照明の増設、などを順次実施してきた。「図書館は成長する有機体である」(「図書館学の5法則」の第5法則)を当館でもモットーにして、今後ともご提出いただいた意見は、真摯に検討し実施していく所存である。少しでも意見を寄せていただければ幸いである。当面の課題は開館時間の延長、図書館利用に障害のある人に対するサービスの向上(アウトリーチ活動)、当館の所蔵資料や当機構で開発したデータベースの活用方法等の講習会の開催、等である。

図書館長のつぶやき

図書館資料の分類とは難しい

ものである。話は冒頭からそれることをご了承いただきたい。もう忘れられかけているが、有名なドイツの精神医学者にクレッチマーがいる。彼は、性格と体型の相関性を直感し、3つの類型を立てた。「細長型・分裂病質」「肥満型・循環病質」「間志型・癲癇病質」である。しかし、人間は多面的である。この類型におさまきれない人が多い。どこか類型からはみだしてしまうのである。そこで人間の多面性にそって多面的な特性の尺度をつくり、その尺度のどこかに位置づけ、複数の特性による人間の分類に発展した。閑話休題、図書の分類の話に戻る。当館は、日本十進分類(主に単行本)と出版機関等別分類(主に調査研究報告書)を併用している。後者はともかく、前者の分類はいつも頭痛のタネである。複数のテーマをもつ資料が多いからである。さらに、一般的には社会科学以外に分類されるものであっても、当館の利用者を想定して、社会科学内の分類記号を割りふったほうがいい資料もある。書架のスペース(当館は電動書架を活用し、スペースの有効活用を図っている)の関係上、複本を配架することはできるだけ避けたいといけないので、どこかに分類せざるをえない。あちらをたてれば、こちらがたらず、である。資料分類は、その館の姿・性格をそのまま表したものだ言われる。目指すべき図書館像を体现する分類法を求めて、分類の悩みから解放される日は永久にきそうにない。

当図書館は、社会科学関係書を中心に和書97,000冊、洋書25,000冊、和洋の製本雑誌20,000冊を所蔵している労働関係の専門図書館です。労働関係の分野には、労働法、労働経済、労働運動、雇用職業、女性労働、パート派遣、高齢者労働、障害者労働、外国人労働、社会福祉などがあり、これらで、蔵書の半数以上を占めています。この他にも、経済書をはじめ経営学、心理学、教育学、社会学など関係分野に及んでいます。また、和雑誌(490種)、洋雑誌(220種)、紀要(450種)、組合機関誌・紙についても、受け入れています。

特色としては、厚生労働省をはじめとする官公庁発

行の統計類などの逐次刊行物、日本経団連など経営者団体の刊行物や民間研究団体刊行物、社史があり、労働組合に関しては、労働運動史、ナショナルセンターや産業別組合の大会資料などを継続的に収集しています。洋書については、特にILO(国際労働機関)総会の議事録やOECD(経済協力開発機構)の刊行物、各国政府の労働統計書などを収集して閲覧に供しています。特殊コレクションは、戦前・戦後を通して労働組合の歴史的に貴重な原資料を収集、保管しています。

開館時間:9:30~17:00

休館日:土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始(12月28日~1月4日)、その他

電話番号:03(5991)5032/FAX:03(5991)5659

利用資格:閲覧はどなたでも自由にできます

貸出:和書・洋書とも2週間、5冊までです

※身分証明書(運転免許証、健康保険証など)をお持ちください

レファレンスサービス:図書資料の所在調査などのサービスを行っています



ご案内
労働図書館(資料センター)